

【下関市総合教育会議議事録】

平成29年度第1回下関市総合教育会議

開催日時	平成29年5月24日（水） 13:30～:14:50
開催場所	下関市役所新館 5階大会議室
出席委員の氏名	前田 晋太郎（市長） 波佐間 清（教育長） 藤井 悦子（教育長職務代理者） 児玉 典彦（教育委員） 林 俊作（教育委員） 松田 まさ子（教育委員）
欠席委員の氏名	欠席なし
委員、関係者及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名	総合政策部長 村上 治城 観光・スポーツ部長 吉川 英俊 観光政策課長 藤原 良二 教育部長 萬松 佳行 教育部次長 伊藤 信彦 教育部次長 井上 成人 教育政策課長 三好 洋一 学校教育課長 木下 満明 教育指導監（生徒指導推進室長） 瀬下 信二 教育研修課長 三井 清 文化財保護課長 沖吉 洋一郎 歴史博物館長 町田 一仁 教育研修課外国語指導助手(A L T) シム・ケンドラ 教育政策課主幹 光吉 計志 教育政策課主査 岡本 誠也 教育政策課主任 松富 潤
傍聴人の数	1人

次第（目次）

【開会の宣告】	P 3
【市長挨拶】	P 3
【教育長挨拶】	P 3
【協議・調整事項】	
(1) 「未来を拓く教育の推進 ～郷土に誇りを持ち、下関の未来を担う子供を育てる～」	P 4
(2) 重点的に講ずべき施策について	
① 「英語教育力向上」 への取組	P 7
② 「いじめ防止・不登校解消」 への取組	P 11
③ 「明治維新150年」 への取組	P 14
【その他】	P 18
【閉会の宣告】	P 18

【開会の宣告】

萬松佳行（教育部長）

皆さん、こんにちは。それでは、ただいまから平成29年度第1回下関市総合教育会議を開催いたします。まずはじめに、総合教育会議の主催者であります前田市長さんより開会のご挨拶をお願いいたします。

【市長挨拶】

前田晋太郎(市長)

皆さん、こんにちは。本日は、今年度第1回目の総合教育会議でございます。波佐間教育長をはじめ、教育委員の皆様方には、平素から下関の未来を担う人材の育成に多大なるご尽力をいただいておりますことを、まずは心から感謝申し上げます。

本日は、はじめに「未来を拓く教育の推進 ～郷土に誇りを持ち、下関の未来を担う子供を育てる～」として、私の教育への思いや願いを述べさせていただきたいと思っております。先月には、教育基本方針説明会にも出席をさせていただき、校長先生方にも私の教育への思いをお話をさせていただきました。本日は教育委員の皆様方と意見交換を行うことで、より一層教育行政の推進につながればというふうに考えております。

続いて、重点的に講ずべき施策について3点協議をしてみたいと思います。いずれも内容も市長部局と教育委員会とが連携して進めていかなくてはいけない事項でございますので、しっかりと議論ができればというふうに考えております。今後、この総合教育会議の場におきまして、様々な教育課題などについて皆様と協議・調整を図り、子供たちの教育環境の充実に努めていく所存であります。本日はどうぞよろしくをお願いいたします。

萬松佳行(教育部長)

ありがとうございました。続きまして、教育委員会を代表いたしまして、波佐間教育長にご挨拶をお願いいたします。

【教育長挨拶】

波佐間清(教育長)

皆さん、こんにちは。教育長の波佐間清と申します。どうぞよろしくお願いをいたします。本年度第1回の総合教育会議が開催されたところでございます。先ほど、前田市長の挨拶の中にもございましたが、本日は、前田市長の初めての総合教育会議の開催となります。私も前田市長から新たに新教育長に任命された思いで、引き続き、全身全霊を傾けて職務にあたりたいというふうに思っているところであります。

さて、教育委員会におきましては、「夢への挑戦 生き抜く力 胸に誇りと志」副題として「ともに学び、ともに育み、未来を創る下関の教育」を教育理念のもとに、教育委員会一丸となって下関教育の推進、充実に取り組んでいるところでございます。こうした中、本日は前田市長の教育に対する思いや願いを聞くことができ、また、教育課題について意見交換を行い共通認識を持つてるということは、これからの下関教育を推進していくうえで大変有意義になると私は期待しております。先日、就任以来、学校訪問も前田市長に行っていただき、児童クラブの訪問や、そして何よりも「下関市いのちの日」の取り組みについても深いご理解をいただき、先日、安部さん宅にも訪問をいただき、自ら率先して命の教育の大切さを語られる、そういう場面にも接することができました。どうか前田市長におかれましては、今後とも、格別な御理解とご協力をお願いしたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願いをいたします。

萬松佳行(教育部長)

ありがとうございました。それでは次第の3番目の協議・調整事項に入ります。これより議事の進行は前田市長さんをお願いいたします。よろしく申し上げます。

【協議・調整事項】

「未来を拓く教育の推進 ～郷土に誇りを持ち、下関の未来を担う子供を育てる～」

前田晋太郎(市長)

それでは、協議・調整事項「(1) 未来を拓く教育の推進 ～郷土に誇りを持ち、下関の未来を担う子供を育てる～」に入りたいと思います。

教育行政を進めていくためには、教育委員会と意思の疎通を図りながら、教育の課題やあるべき姿を共有していくことが大切なことだと思っております。そのため、本日はまず私の教育の思いや願いを述べさせていただいて、それに対してご意見やお気づきの点をいただきたいというふうに思っています。教育は、当然国家100年の計ではありませんけれども、この下関の未来を長く考えたときに、これはなくてはならない大変大きな柱であろうというふうに考えております。下関は、大変人口の減少も激しくて、特に若い方々が外に出ていく機会が非常に多いということでございます。

まず私が考えているのは下関の市民がですね、下関に今、誇りとか自信とかそういったものを見失ってしまってるのではないかというふうに強く考えております。都会が良い、田舎は良くないという、そういうふうなイメージというかですね、そうではなくて下関っていうまちは非常に深い歴史と、美しい自然と豊かな食文化がある素晴らしいまちであると。そういったことを、まず、大人はもちろん認識をしていかななくてはいけません、それを子供達にしっかりと丁寧に深く伝えていく教育、子供達が幼いときに下関に対する愛情とか郷土への誇りとか、その先にある家族愛とか地域愛とか、そういったことの大切さを伝えていくということを教育の柱にしていくべきではないかなという思いが私強く思っております。このたび市長に就任をいたしましてですね、その思いを教育長、教育委員会、そして今日、教育委員の皆様方にお伝えをしながら、じゃあその柱に基づいて、この次何を具体的な政策をしていく必要があるのかっていうことをご協議いただく機会になるのかなというふうに考えております。やっぱり、それは一瞬都会に出てもいいんですよ。学校もですね、優秀な学校は都会にもたくさんありますし、私も長崎に5年間おりまして、だからこそこの郷土の良さ、下関の良さを感じて、また政治の方に志が立てたということもありますんで、その下関の良さを幼い時にもっともっと伝えていく必要があるんじゃないかなということでもあります。

次にですね、その次に色んなことをまた考えていかななくてはいけません、先ほど教育長が少し「いのちの日」について触れられましたけれども、やはりいじめに関しては、これは絶対に許してはならないということで、「いじめゼロ」に向けて、これは徹底的にやっていきたいなというふうに思っています。ただ、徹底的にという言い方すると、あたかもやった側が悪みたいな感じの言い方になってしまうんですが、実は、私も幼い時に小学生の時、中学生の時に、友達に対してあれはもしかしたらいじめだったんじゃないかなというふうな思い当たる行動や発言の記憶が頭の片隅に実は今でもあります。あの時、相手が悲しい顔をしたり、泣いて次の日学校に来なかつたりってということが実は経験としてあるんですけど、きっと悪意的なことではなくても、相手を傷つけてしまったり、子供ですからそういったことは必ずどうしてもあると思うので、そこは我々大人が配慮をしてあげたり、起きてしまった後のスムーズなスピーディーな対応によって、一瞬悲しいことが起きたかもしれませんが、その後お互いが分かり合える素晴らしい環境が改めてつくっていただけるのではないかなというふうに思っております。そういった意味でもしっかりとやっていきたいと思っております。

それから私が思うのは、やはりしっかりと学力の底上げをやっていく必要があるのではないかなと。学歴社会に対応するためではないんですけども、やはり基礎学力をきちんと学び、徹底して幼い時に培っていくことが、将来生きていくための必要なエネルギーというか、人間としての土台になるのではないかなというふうに強く思っております。学力をしっかりと学んでいくことで色んな出会いとか、将来の夢とかそういったものが見つかる可能性もありますし、自分が夢を持った時に手を伸ばせば届くところに自分がそこに居ると、子供達が。そのためにも基礎学力というのは、しっかりと教育の中では取り組んでいきたいなというふうに思っています。主には以上の3点。後はコミュニティ・スクールとかもこれから地域を絡めてやっていかななくてはいけない

なというのがありますけれども、今日の会議においてはこの3点を主なテーマとして、皆さんに色々ご意見をいただきたいというふうに思っております。よろしく願いいたします。何かご意見、お気づきがありましたらよろしく願いします。林委員、お願いします。

林俊作(教育委員)

今お話を色々聞きまして、大変共鳴することがたくさんあるというふうに教育の方針として思いました。特に学力の向上。これは私もPTAやっていた時に、下関はしっかりやらんといけんんじゃないかと、ずっと。県内の市町村見ても下から数えた方が早いようなところに順番があったりしましたから。これじゃ「誇り豊かに生きる」の方はそれなりにできとるが、学力は上手くいっていないというんじゃない、県教委あたりが見たらやっぱり学力をしっかりやってくれるところの方が良く見えるというか、そういう可能性もあるんですね。是非、学力の向上、底上げをせんにゃいけんと思うんですよね。底上げをしっかりやるということについては、市長さんにも御力をいただいて、私共もそういう方向で努力をしていきたいなというふうに思っております。

あと、もう1つは、下関に対する誇りを持つてるといふ、これはなかなか私も思うんですけども、やっぱり市長、外に出たから下関のまちの良さっていうのがわかるっていうのは、あると思うんですよね。私も他所へ出ましたから、下関はなかなか住みやすいまちではあると思うんですけど、ずっとここで住んでるだけじゃなかなか。通勤族なんかはたぶん結構住みやすいというふうに思われる方も多いと思うんですよね。それをどうやって上手に子供達にアピールしていくかというの、これも1つ大きな課題だろうな。ずっと生まれてからこの住所地だったら比較するものがないから、良いも悪いもなかなかわかりにくいようなところがあるかもしれないとちょっと思いました。その辺、是非知恵を出していただいて、やっていただければというふうに思います。以上です。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございます。学力向上については、やっぱり数字が出ますから。先生の成績表みたいな感じになってしまいがちなところがあるかもしれませんが、そうではなくて大切なことは、子供達に勉強の楽しさとか、なぜ勉強が必要なのか、社会に出た時にこういったことが君達には待っているんだということを前向きに教えてあげていくことが、まず学力につながるのかなと。勉強はできるようになると楽しいんですよ。できないとどんどん楽しくなくなってしまう魔法の要素がありますけれども、その辺りのことをどうやって教えていくか、伝えていくかということが大切かなと思っております。他にございますでしょうか。

児玉典彦(教育委員)

今、市長さんの方からいじめの問題と学力の問題があったんですけど、いじめの問題と学力の問題っていうのは密接な関係があり、子供が安心して学べる学校で学ぶことが学力の向上につながります。学力の向上を語る時に最初に考えなければいけないのは、安心して学べる学校、それを作っていくことが一番ベースになければならないと思っております。

子供が入れ替われば環境も変わる。人間環境も変わるので、いじめゼロっていうのは難しい。逆に、私は、いじめゼロってことは考えるな、必ずいじめはあるから、発見すること、見つめることに力を入れるように、学校現場にいるときには教職員に言ってきました。そういう意味で安心して学べる学校を作ること、そこにまず力を入れることを、是非提案したいなと思っております。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございます。学力は、まずは安心して学べる学校ということが大切だということですね。

児玉典彦(教育委員)

子供が安心して学べなければ、学力も何もつきませんので、ベースはそこだと思っております。

前田晋太郎(市長)

安心して学べるっていうのは、例えばどういう感じでしょうか。家庭と関係なく。

児玉典彦(教育委員)

もちろん家庭教育とも関係がありますけど、例えばいじめが起きた時に教員が気が付かない。あるいは、手を挙げて発言した子供に対して冷やかすような発言があっても、教員が対応できない。そういうところでは安心できませんよね。そうじゃなくて、自分の考えをしっかりと言えるような集団を作る。そういうことをきちんとさせようと思ったら、やっぱり規範意識の基になる時間を守ったり、整理整頓をしたりするというような、そんなことに力を入れなくてはならない。落ち着いた学校を作ることが、安心した学校作りになると考えます。

前田晋太郎(市長)

深いご意見がいただけたと思います。冷やかしがあつた時の対応が先生ができるかどうかとかですね。

児玉典彦(教育委員)

風いだ海で魚が1匹ポンと跳ねればわかりますよね。魚が跳ねたっていうのが、海が凩いでいれば。でも海が荒れていると魚が跳ねたって見えません。それと同じだと思うんです。落ちついた学校でいじめを見れば教員はすぐに止める。だけど、学校が荒れている状況でなかなかそれを見つけない。落ち着いた規範意識のしっかりした学校を作ることが重要だなと思っています。

前田晋太郎(市長)

はい。落ち着いた規範意識のしっかりある学校。これは1つのテーマになりますね。ありがとうございます。あと、いじめはゼロということではなくて、いじめは必ずあるからその時にどう対応できるか。

児玉典彦(教育委員)

はい。いじめがないと思ってぼんやり子供達の前に立っていれば見えるものも見えません。いじめは必ずある。どこかにある。そういう目で子供達と向き合うようにするのが教員の構えとしては大事ななと思っています。

前田晋太郎(市長)

教育長どうでしょうか、今の話。

波佐間清(教育長)

我々は目標とすれば「いじめゼロ」。これを目指したいという目標は強く思っています。学校経営の中で、「いじめのない学校を目指しましょう」というお題目と言ったらおかしいですが、目標としては挙げたい。しかし、現実を考えた場合にそういうものっていうのは、人間関係、コミュニケーション、色々な関係がある以上、こういうものは必ず起こりうるものであるという前提を我々教員が持つておかないと、安心して切っていると見逃してしまう、見落としてしまうという危険性が非常にある。それが一番我々は恐ろしいことで、先生が気が付かないでそのまま放置して小学校で起こっていた事案が中学校になってそこでバンッと爆発してしまったとか、そういうこと例っていうのは結構あるんですね。そういう意味合いで、今、児玉委員さんはそういう辺りをご指摘をされたのではないかなというふうに思っています。

前田晋太郎(市長)

はい。ありがとうございます。他にご意見がありますでしょうか。松田さん、いいですか。

松田まさ子(教育委員)

先ほどの児玉委員のお話で、教員の先生方の対応っていうので、規範意識を持ってってということでしたけど、私もまだ小・中学校の子供がいる親として学校の先生の話の色々聞くんですけども、時間を守らないとか、生徒って言われてましたけども、先生自体のそういう意識ってというのが低い先生に対して親が感じるには、子供から尊敬できる先生じゃないとその先生の授業に対する子供達の意識も下がってくるので、そういうところはどういう場でも当たり前のことですけども、生徒さんを前にしている先生達もそういう意識を必ず持っていただきたいなと思います。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございます。藤井委員、よろしいですか。

藤井悦子(教育長職務代理者)

いじめ問題についてですが、学校の先生が子供を見捨てない教育が重要で、どんな子供にでも声掛けする取組があります。実は、ある学校での話ですが、その学校は大変荒れていたそうで、その中心人物に先生が積極的に声掛けをして、段々と学校の風紀が良くなったという例がありました。やはり、先生方が一人ひとりの子供に対する気持ちの入った声掛けをしていくことが一番大事だと思います。

また、先ほど言いました心の中に故郷を持つ人っていうのは強いと思います。子供時代に育った環境、地域の方々との関係が、将来、子供が外に出た時に地元が良かったと思えるようになるためには、地域の方々との関係がとても大事だと思います。今は、学校と地域の関係も多々あり、コミュニティ・スクールなどで子供と地域の接点があります。そこで学校だけの人間関係だけでなく、地域との関係も密にして地域で子供を育てることによって、将来、子供が下関に戻ってきて、ここで生活したいと思われるような環境作りが必要だと思います。そこで、せっかく戻ってきて働く場所がない、外に出て行った方が良いと思われなためにも地元の企業に強くなっていただき、企業の方から学校に出向いていただいて、地元にはこんな企業があるよとアナウンスすることが重要で、是非行政の力を發揮していただいて地域に定着する若者が増えれば良いのではないかと思います。よろしくをお願いします。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございます。最後のところ、企業との連携っていうか、今、市大の卒業生が約毎年450人ぐらいのうち地元への雇用、就職率が去年8%。ですから毎年4、50人ぐらいだそうなんですけど、ここはですね、もう少し上げていく必要があるのかなというふうに思っています。今、言われたように、学生が4年間下関で勉強して、下関のことをいっただれだけ知って卒業するか。自分のことを振り返ってみるとほとんど地域のことをわからないまま出ていくし、企業のオーナーと接触する機会なんかまずないですよ。でも、こういう何か出会いがあって、「この社長格好いいな。面白いこととされているからついて行こう。この会社に入りたい」とかこういうコミュニケーションをこれからどれだけ作っていけるかっていうことを、実は昨日、企業立地懇話会っていう企業の社長さんや工場長さんとずっと話をしたんですが、皆さんすごく共感してくれて、学生と接触したいということで。人が今足りないんですって。優秀な人材が欲しいと、下関から。だからこのこのミスマッチを今からどう作っていかっていうことを、我々行政の与えられた大切な仕事かなというふうに思っています。

【協議・調整事項】

(2) 重点的に講ずべき施策について

①「英語教育力向上」への取組

前田晋太郎(市長)

続きまして協議・調整事項の「(2)重点的に講ずべき施策について」に移ります。本日は3点について協議・調整を行いたいと思います。

まず、「①英語教育力向上への取組について」です。私は英語力を身につけることはとても大切なことであると考えております。子供達がですね、これからしっかりと英語力を身につけていけば将来、先ほどの話にもつながりますけれども、生きる力というか色々な出会いがあったり、色々なお仕事に就く可能性が広がったり、なんといっても人間の幅もまた表現力も変わってくると思いますし、そういった意味でもこれからの時代では必要なことなんだろうと思っておりますので、これについての取組みについてのご説明をお願いしたいと思います。はい、どうぞ。

三井清(教育研修課長)

それでは「英語教育力向上への取組について」、教育研修課から、「ALT」と「教員研修」の2点からご説明いたします。資料1ページをご覧ください。新学習指導要領の改訂に伴い、平成32年度から小学校3・4年生で「活動型」の英語教育を週1コマ、5・6年生で「教科型」の英語教育を週2コマ、実施の予定です。3年生から英語教育が導入される小学校においては、英語指導力の向上が大変重要です。

では、英語力の向上に向けて重要な役割を担うALTについて、まずご説明いたします。現在、下関市は資料2ページにお示した13人のALTを各園・小・中・高等学校に派遣し、今年度8月に1人増員し、2学期から14人の予定です。各学校では、ALTとの交流を通じ、国際交流を図るとともに、英語教育の充実に努めています。ALTの配置スケジュールですが、資料1ページの1のように、計画的に増員し、平成32年度の新学習指導要領実施の年には、市内22中学校区に各1人ずつ配置することを目標にしております。資料1ページの2には、平成27年度にALTが9人だった時と、平成28年度に13人となった時を比較しています。ALTの増員により、①の英語力の向上や②の中学校での英語暗唱弁論大会の参加希望者の増加など英語への関心の高まり、また、③の英検3級以上の取得者の増加などの効果が表れてきております。その他、ALTによる地域住民への英会話教室や英語絵本の読み聞かせなど、授業以外の場でもALTの効果が表れています。④の子供・教員の感想では、ALTとの活動を楽しみにしている小学生がいたり、教職員の意識が変容したりするなどの効果もあります。今日は、実際に英語教育に携わっているALT、資料2ページのALT一覧の(2) シム・ケンドラが出席をさせていただきますので、ALTから見た英語教育の感想を聞いてみたいと思います。それでは、まず自己紹介をしてください。

シム・ケンドラ(外国語指導助手・ALT)

こんにちは。シム・ケンドラと申します。ニュージーランドの出身です。今、ALTの経験は2年間です。担当の学校は、第一幼稚園、養治小学校、文関小学校、日新中学校、関西小学校、桜山小学校と文洋中学校です。

三井清(教育研修課長)

では、ALTとして学校で子供達に英語を教えてみて、やり甲斐を感じていますか。

シム・ケンドラ(外国語指導助手・ALT)

はい、感じています。子供達と一緒に過ごす時間は凄く楽しいです。先生と一緒に授業をして、学校生活を経験したり、子供と一緒に給食を食べたりも凄く楽しいです。授業では英語を使って、ゲームやコミュニケーションをとって、凄く楽しい時間を過ごしました。また、学校と一緒にいる時も、子供達から日本のことを教えてもらったり、ニュージーランドについてのことも教えて楽しいです。

三井清(教育研修課長)

小学校で初めて英語に接する子供達にどのような点に気を付けて英語を教えていますか。

シム・ケンドラ(外国語指導助手・ALT)

最初は英単語を繰り返して練習をしたり、ゲームをしたり、英語の絵本とか歌、童謡など聞か

せたり、楽しんで英語に親しんだ方がいいと思います。また、中学校に入学してから困らないように、アルファベットや簡単な英語の日常会話も身に付けられるようにしています。

三井清(教育研修課長)

では最後に、今後下関市において英語教育がますます充実していくためには、どのようなことが必要だと思っていますか。

シム・ケンドラ(外国語指導助手・ALT)

今までは小学校でALTが中心となって授業をやっていますが、今からは担任の先生が中心になってALTと一緒に英語の授業、外国語活動を一緒にやってもらうのが良いと思います。また、ALTがいない時でも担任の先生が自分でやってみることを薦めたいと思って。子供達が小さい頃に英語に触れるようにしたいと思っています。

三井清(教育研修課長)

ありがとうございました。小学校では、ALTと協力しながら担任が授業を行っていますが、実際にはALTの学校に配置される時間数も限られていることから、担任だけで授業を行うこともあります。このことから、ALTから今話がありましたように、教員の資質向上に関する取り組みが必要になります。

次に、教員の資質向上に関する重点事業についてご説明します。資料の3ページをご覧ください。重点事業の1つ目は、①「グローバル・ティーチャー育成サポートプラン（GTI研修）」です。この研修は、目的や対象とする教員等から、「小学校外国語活動研修会」「派遣研修」「校内研修」の3種類に分かれています。1つずつご紹介すると、1つ目は、「外国語活動」の指導経験が少ない小学校の教員を対象として行う「小学校外国語活動研修会」です。NHKの番組等を監修している先生をお招きし、講義をしていただく予定です。重点事業の2つ目は、下関市の英語教育を牽引していく教員5～10人程度を姉妹都市である韓国釜山のグローバルビレッジに派遣し、英語漬けの研修を行う「派遣研修」です。3つ目は、小学校4校程度を対象に、外部指導者を招聘するなど、英語指導体制の充実に向けて、校内研修を支援する取り組みを行っているところです。続いて、資料の4ページをご覧ください。次の重点事業は、「グローバル・ティーチャー・イングリッシュ・キャンプ」です。ALTも参加するこのキャンプは、小学校教員を対象に、レクリエーション等を通して、英語を使う研修を行うことにより、実践的なコミュニケーション能力の向上を図っているところです。以上、下関市の英語教育について「ALT」と「教員研修」の視点からご説明しました。どうぞよろしくお願いたします。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございました。ただいまの説明について何かご意見ございますでしょうか。藤井委員。

藤井悦子(教育長職務代理者)

すみません、先ほど幼稚園の方で第一幼稚園にも行かれているとお聞きしたんですが、幼稚園ではどのような指導をなさっていらっしゃるんですか。

シム・ケンドラ(外国語指導助手・ALT)

午前中に第一幼稚園に行きました。多くは簡単な絵本の読み聞かせをしたり、絵本についての色とか簡単な英単語を繰り返して、その単語を使ってゲームをします。カルタとか、色を使ったゲームをして英語の歌も歌うし、そこから英語について簡単な英単語を繰り返してみんな歌えるようにしたいと思います。

藤井悦子(教育長職務代理者)

幼少の頃から英語に親しむのは、とても良いことだと思います。勉強として構えて取り組むよ

りも、遊びの中で耳から自然に入ってくる英語の方が身に付きやすいと思います。ありがとうございました。

前田晋太郎(市長)

はい。他にはいかがでしょうか。児玉委員。

児玉典彦(教育委員)

A L Tの効果については、学校現場では実証済みですから、是非これからも計画通り必要に応じてほしいと思います。ただ懸念は2つほどあって、1つは中学校の入学した時に子供達、英語はとっても好きなんです。ところが、1学期の終わりからライティングが始まると、物凄く差が出るんです。その差が出ることによって気力をなくしていく子供がいる。ライティングのところを小学校の英語科で上手にクリアしてほしいなど。そういうことを事務局の方でサポートしてもらえたらと思います。もう1点は小学校の教員。英語を教えることになって、英語を教える指導技術を早急に身につけなければなりません。英語を教えることに一生懸命になることによって、国語・算数の指導がおろそかになる。そのことによって相対的に学力が下がるのではないか、そんなことを私は心配しています。小学校の先生にとって英語が負担になるのではないか。そうでなくても来年からの道徳があります。そうなった時に小学校教員へのサポートをしっかりと出来ないか、大変なことになるのではないかと心配しています。以上です。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございました。ライティングが始まると学力が下がってってしまうという認識はどうですか、教育委員会としては。

三井清(教育研修課長)

子供達を書くということに対して抵抗を感じたりとかっていう部分は、今、児玉委員さんがおっしゃったようにあると思います。その部分をこれから小学校においても英語が導入されることによっては、十分に中学校でのそういう課題等を踏まえて対応していかなければいけないということを確認しているところです。

波佐間清(教育長)

小学校に外国語活動という形で5年・6年生が今現在やっています。それが今度3・4年生に下りてくる。そういう中で今児玉委員が述べられたように、本来は例えば小学校の英語教育に対して、今我々はA L Tの援助を受けながら指導している。中学校ももちろんそうですが。本当は国の施策としてですね、小学校に英語教育を導入するのであれば、専科の英語教員を小学校に配置をするだけの教員配置をしてもらいたいというのが各学校、教育委員会の望みなんです。しかし、この辺は財政的なゆとりがないがために小学校の先生が英語も教えなさいと。免許を持っていないけれど教えなさいという形が今現在の状況です。それに対して、A L Tにサポートをしていただいているという格好です。無理な要求はできませんけれど、本来はそういう形を全国の教育長、各学校の校長さん達は望んでいます。だけどそれは、財政的には難しい。そういう意味で、さっき研修の方から先生方の英語教育の研修をしっかり充実したものをやっていこうということで、英語漬けのイングリッシュキャンプをしたり、それから今、今年から初めてですが釜山のイングリッシュガーデンに行って英語をしっかりとマスターできる小学校の先生をしっかりと養成をしている、というのが今回の要請の緊急な課題なわけです。そういうことに我々としては力を入れて、子供達が小学校でせつかく英語を教えているのに、中学校になって英語嫌いを作ってしまうと、スタート時点からそういうことでは非常に残念なことになってしまう。英語が大好きな子供達をつくっていくことが、我々次の未来へ生きる子供達ではないかなというふうに思っています。その辺をまた、我々市教委としてできることをしっかりと学校にサポートしていく、先生方の教員養成、英語力向上の要請をしていくということに力を入れていきたいというふうに思っています。以上です。

前田晋太郎(市長)

教育長ありがとうございます。これまでの取り組み、本当に素晴らしいと思うんですけど、今後もさらに充実させていくために、今教育長も少しお話がありましたけれども、特に事務局の方からでございますでしょうか。はい、どうぞ。

三井清(教育研修課長)

今後さらに英語教育を充実させていくためには、今、教育長が申しました英語に関する研修を受けた教員を中核として、たぶん教員がそれを学ぶという機会をこちらが提供していくということが重要だというふうに認識しております。

前田晋太郎(市長)

他に皆さんご意見がございましたら。よろしいですかね。

(はい)

前田晋太郎(市長)

それでは引き続き英語教育力の向上に努めていくということで、担当の皆さんこれからもよろしくお願いをいたします。

【協議・調整事項】

(2) 重点的に講ずべき施策について

② 「いじめ防止・不登校解消」への取組

前田晋太郎(市長)

続きまして、「②いじめ防止不登校解消への取り組みについて」、協議・調整を行います。私自身小学生を養育する父親として、子供達が安心して学校に通える環境作りはとても重要なことだというふうに思っております。それでは、まず、本市のいじめや不登校の状況等について説明をお願いいたします。

瀬下信二(教育指導監(生徒指導推進室長))

生徒指導推進室より、いじめ・不登校の現状を説明いたします。まず始めにご了承いただきたいことがございます。毎年文科省からの調査の「問題行動に関する調査」がありますが、経年変化をして観察しておりますが、本年度は調査が遅れております。それで速報を出すことができませんので、申し訳ないですが、平成27年度までの「いじめ・不登校の状況」について説明することで、本市の傾向を見ていただくことにご了承をお願いいたします。

では、まずはじめに、いじめの現状を報告します。生徒指導推進室が出した1ページをご覧ください。いじめについては、いじめ防止対策推進法が平成25年6月28日に公布され、平成26年度より各学校が基本方針を作成し、定義を確実に捉え、児童生徒間トラブルについても定義に沿ってより適切な判断ができるようになってきていると思います。そのためその表を見ると平成26年度よりいじめの認知件数が上がっています。市教委としては、いじめを見逃さず、認知率を上げ、早期解消へとつなげるよう指導してまいりたいと思っております。右のグラフですが、学年別認知件数は、全国や山口県と同じように下関の中学校でも中学校1年生が多くなっております。3段目のいじめの態様の表をご覧ください。いじめの態様は全国や県と同じようにまず、「冷やかしかからかい」が最も多いという状況です。いじめの発見のきっかけは、教職員以外、保護者や本人からの訴えが多いことがわかります。小学校・中学校とも担任が発見しにくいこともわかります。一番下の表の認知数は、全国や山口県に比べて低いことから、引き続きいじめの定義に沿ったきめ細かい認知や対応を進めていきたいと考えております。

では、不登校ですが、4ページをご覧ください。平成27年度の不登校の状況は、小学校が6

9人で若干減少しています。中学校も24人減少しております。しかし、小・中学校の合計が255人の児童生徒が不登校であることは非常に心配な状態が続いております。現状は以上です。

前田晋太郎(市長)

続きまして、いじめ防止や不登校解消に向けた取り組みについてはどのようになっていますでしょうか。説明の方をお願いいたします。

瀬下信二(教育指導監(生徒指導推進室長))

それでは2ページをご覧ください。いじめ防止の昨年度の取り組みは、そこに(1)から(4)まで並んでいます。多いものですので上から順番に、この大まかなことだけを伝えたいと思います。

(1)「いじめ防止対策推進協議会」の設置をしております。(2)未然防止、早期発見・早期対応に向けた①～⑥までの取り組みをしております。(3)教職員研修では①～③までの取り組みをしております。(4)インターネットや携帯電話を利用したいじめの対応を行っております。

続いて不登校の方の取り組みですが、4ページをご覧ください。2の「平成28年度～不登校1/2への挑戦～」をご覧ください。不登校解消の昨年度の取組は【チャレンジ1】から【チャレンジ5】までがございます。【チャレンジ1】は、訪問支援で中1ギャップの解消ということです。今、下関では教育支援教室「かんせい」を関西小学校の中に開設しております。その関西小学校の中に文洋中学校の分教室というのも開設しております。ここにはあまり記載していませんが、昨年度アウトリーチ事業という取り組みをやりました。アウトリーチ事業はまた後で説明いたします。2段目のグラフと表をご覧ください。「かんせい」には、平成28年度は小学生8人、中学生42人が在籍しておりました。登校できない時は、「かんせい」の職員が訪問支援を実施しました。3段目の訪問支援の実績表を見ると平成27年度は2人に対してしか訪問支援をすることができませんでした。平成28年度は「さくらやま」から「かんせい」という形に変わって、初年度として19人に対して訪問支援を364回いたしました。先ほど言ったアウトリーチ事業は、完全引きこもりぎみの生徒に対する訪問支援する文科省の委託事業でした。5人のスタッフを採用して12人に対して182回の訪問を実施し、今年度「かんせい」へ3人ほど通級できるようになっています。東亜大学へ1人繋げることができました。このような取り組みも、平成28年度末の分教室「かんせい」の中学校3年生の進路を見ても、25人の中学3年生中23人が進路を決定できたという成果が上がっています。【チャレンジ2】ですが、心をつなぐ1・2・3運動は小学生の不登校を生まないための家庭訪問を先生方が一生懸命するという取り組みです。【チャレンジ3】は保護者の集いで保護者の研修の啓発をするということです。【チャレンジ4】は各学校の状況を、個別票を出してもらって進行管理をして長引かないようにという取り組みです。【チャレンジ5】は東亜大学臨床心理相談研究室と連携をして学校に復帰するために、学校以外の受け皿として、市教委と協力して支援をしていただく提携です。平成28年度は、中学生6校で8人、小学生は2人が東亜大学へつながっております。それからその下の方にありますが、オープンドア事業ということで、これは中学校を卒業して、15歳になると不登校の子供とかの支援が薄くなりますので、その支援をするために市のこども保健課につないで、卒業後の支援をつなぐという取り組みをはじめました。それからその下、「魅力ある学校づくり調査研究事業」というのは、先ほど児玉委員が言われた安心な学校を作るという取り組みです。以上です。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございました。今、いじめ防止・不登校解消に向けた取り組みの説明がありましたが、この取り組みをさらに充実させていくために必要だと思われること、それから今後の課題について室長の方からご説明いただきたいと思います。

瀬下信二(教育指導監(生徒指導推進室長))

いじめの課題ですが、1つ目として、いじめを防止するためのやはり教職員の質の向上のための研修の充実だと思っています。見逃さないということ。たくさん案件に対応できる力だろうと思います。2つ目は小・中が協働歩調での未然防止、早期発見、早期対応の組織的な取り組み

を充実させることだと思っております。

それから不登校ですが、今言った成果がある下関市の教育支援教室「かんせい」の拡充。現在「かんせい」は、7人の職員で43人の児童生徒を抱えています。その授業が終わった後に、15時30分から16時30分のこの1時間を使って、昨年度は364回も訪問をしていただいております。本当にフル活動という形になっております。2つ目は、完全引きこもりぎみの児童生徒の対応ということで、アウトリーチという事業を行いました。これは国の事業で昨年度で切られてしまいましたので、今年はこの完全不登校ぎみの生徒に対する今後の支援っていうのが非常に難しくなっておりますので、そういうことを新たに立ち上げて、不登校ぎみ、完全不登校ぎみの生徒に対応していきたいという思いはあります。以上です。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございます。対応としては、先生の資質を向上する、見逃さないという言葉がありました。先ほど児玉委員からまさに同じようなお話があったと思いますけれども、児玉委員、この3月まで中学の校長としていじめ防止や不登校の解消に非常に熱心に取り組まれたことと思いますが、現場で感じられたこととか、課題と思われたことがありましたら少しお話をいただきたいと思えます。

児玉典彦(教育委員)

はい。市教委の取り組みによって、あるいは学校現場の努力によって、不登校やいじめも随分減少してきました。校長として、いじめが起きても対応することが学校現場でも早くなったなど、教員の取り組みを良く頑張っているなど思っていました。ただ、私が一番懸念していたのは、このままだったら教員が過労で倒れてしまうのではないかと。あまりにも業務が多くて教員がそれに追われている。今でも昼休みも何もかも子供のそばにいて、子供の日記に目を通して、わずかな空き時間には校内を見て回って、その状況の中でいじめを見つけるっていうことが難しくなるのではないかと。今まで足し算足し算で研修を積み重ねるなど、足し算でいじめや不登校を減少させていきました。けど今からは学校現場から、業務を引き取っていくことで、教員にゆとりを持たせて、いじめや不登校に対応できるようにすることが必要だと思っております。あまりにも足し算足し算でいっているのも、もう現場は背負いきれなくなると思えます。

前田晋太郎(市長)

なるほど。ありがとうございます。皆さんで問題を対応するたびに色々話し合ってきてルールを作っていけばいくほど、先生の課題が、どんどん仕事が増えてきて、やっぱりそこを軽くしてあげて、子供達にもっと気づくような余裕を持たせてあげることがこれから課題ということですね。このあたりも含めて、いじめや不登校についての少し意見を教育委員の皆さんから何かありましたら自由に意見交換を少ししていただきたいと思えます。

波佐間清(教育長)

各学校で先ほど児玉委員の方からおっしゃっていただきましたけど、先生方の本当に多忙感といいますか、今そういう中で、特に中学校は部活動があって帰る時間がない。土日もそういうことに関わって先週も県体があったりして、先生方はもう土日はほとんどありません。そういう中で今前々から言われてはいるんですが、先生方の休養をとる、ゆとりの時間をとること、多忙感の解消に向けて業務改善をしっかりとしていこうということで、今年は特に市教委もですが県教委も含めて、こういう業務改善で例えば部活動の練習を週1日はお休みにしようとか、それから、市役所でもやっているように、ノー残業デー、こういうのをしっかりと休養をとる、そういう時間をとれるように、そして家庭を大切にしたり、地域の活動に先生方もしっかりと出て行こうというようなことで、そういう業務改善の意識をしっかりと変えていき、ゆとりを持って子供達を見ることができるようしていきたいというのが今年の目標の1つです。資料の4を見ていただいた不登校の数の状況を見ていただきますと、これは平成22年小学校が48人で、中学校257人で305人の子供が不登校であったと。ところが、このまだ2年・3年前はトータル

すると400人以上いたんです。それが305人になり、現在255人になっているわけです。色んな意味で先生方がこういう不登校に対して、改善をして、1人ひとりにそういうことにならないようにということで取り組んだに結果が、これでもやっぱり多いんですよ。だけど以前はもっと、倍いたということからの改善を考えていって、今これなんです。そして、大きい②のところ昨年ですが、不登校1/2への挑戦と。私はこの言葉を去年出したんですが、最初は不登校ゼロへの挑戦、なぜできんのかって思っていたんです。ところが、一生懸命やっても、例えば引きこもりの子供もいるわけですね。親に関わろうとしても門前払いを受け、先生方が何度も何度も行ってもだめな子供も家庭もあるんですね。そういう中で、でも教師としては不登校がいることに対して、安心してはいけないよ。せめてどの子にも関わって、目標として1/2を目指して関わっていいんじゃないかというのが、この目標としての1/2への挑戦という言葉になっているんです。本当はゼロを目指したいんですけど、そういう中で先生方が一生懸命関わって、目標として1/2に減らしていこう。トータル255人が来年度は100人台に何とかなってくれるといいなと願っているわけですけど、それだけ、先生方も不登校の子供に家庭で関わり、家にお迎えに行ったりとか色んな試みをされて努力をされてる結果が、こういう形になっているということをご理解いただければというふうにも思っております。何もしないではなくて、やったうえでの結果がこれであるということをご理解いただくことが大事な事かなというふうにも思っております。また、分教室と「かんせい」という不登校の子供達、学校に行けない子供達が「かんせい」のところに行けばなんとかそこで学力をつけることができる。分教室は文洋中学校の一応分教室という形になっていますけど、学校には行けないけれど、この分教室に来て少しでも学力をつけて高等学校へ行ける、そういう子供もたくさん出てきているので、大変嬉しく思ってる所でございます。以上です。

前田晋太郎(市長)

教育長、ありがとうございます。1/2への挑戦。本当に皆さんで、先生方の負担のお話も先ほど出ましたけれども、皆さんの協力を得ながら、少しでも子供達がまた学校に通える環境になればいいと思います。では、この「いじめ防止と不登校の解消」については、今後も引き続きしっかりと取り組んで行くということで、今後ともよろしく願いいたします

【協議・調整事項】

- (2) 重点的に講ずべき施策について
- ③「明治維新150年」への取組

前田晋太郎(市長)

続きまして、「③明治維新150年への取り組み」に移ります。平成30年に、来年ですね、明治維新150年の節目を我が市は迎えます。観光をはじめ、商工、農林水産など様々な分野において本市の活性化に資するまたとないチャンスであるとともに、教育的分野においても下関の歴史を振り返って、また記念事業などを行っていくことは、子供達を含め下関市民として郷土への誇りや愛着心を一層深めていく絶好の機会であろうかと思っております。このチャンスを有効なものとするためには、個々の部局がそれぞれに取り組むことも大切ですが、相互に連携をとって、で全庁的・全市的に取り組む必要があると考えております。そこで今後の取り組みについて協議をしてみたいと思います。まず、全市的な取組方針や考え方など概括的な説明は総合政策部長からお願いしたいと思います。村上部長、お願いします。

村上治城(総合政策部長)

総合政策部の村上でございます。よろしくお願いいたします。明治維新150年の取り組みについて、趣旨は今、前田市長からまさにお話しがあったとおりでございます。下関市といたしましても、国や県そして関わりのある自治体と連携して取り組みを進めていこうと考えております。また一部の事業ではすでに、準備を始めているところでございます。しかし、取り組みと一言で申しましたが、例えば行政が行うもの、文化団体や観光に携わる団体が企画をするもの、また、

民間の事業者の方々が考えられておられることもあろうと思いますし、地域のみなさんが実施されるもの、維新発祥の地である本市でございますので多種多様なものが想定されます。そこで、7月になりましたら、私共総合政策部が庁内の調整役といたしまして、市役所内に関係部局からなる一つのテーブルを作ろうと思っております。各部局は関わりのある団体の皆様と連絡を密にさせていただきまして、庁内で定期的に情報をやりとりすることにより、市内でどのような取り組みを誰がどこで行っているかを共有するとともに、市内外に向けて発信いたしまして、できうれば、例えば観光団体と文化団体が協力して動くような場面が生まれればなお良しというふうを考えております。市あげての取り組みによりまして、国が示す明治以降の歩みを遺す、また明治の精神に学ぶ、これらを実践し、さらなる下関市の活性化に繋げていきたいと考えています。以上でございます。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございました。村上総合政策部長からでしたが、明治150年といえば観光行政の推進ですね。先ほど観光について少し話が出ましたが、観光・スポーツ部、吉川部長から少しお話しをいただきたいと思っております。

吉川英俊(観光・スポーツ部長)

観光・スポーツ部の吉川でございます。よろしくお願ひいたします。先ほど前田市長、村上総合政策部長からも説明がございましたが、「明治維新150年」の取り組みについて、全庁的な組織が編成された場合には、各部局の連携を取りながら実施をしていきたいというふうを考えております。現時点で観光の取り組みについて、少しご説明させていただきたいと思っております。観光サイドといたしましては、この「明治維新150年」、これは下関をPRする絶好のチャンスというふうに捉えておまして、山口県とも連携して、観光客の誘致には取り組んでいきたいというふうに思っております。また、9月から今年の12月まで、4カ月間開催されます、JR6社、山口県で実施いたしますデスティネーションキャンペーン。これにつきましても「幕末維新」をテーマとしておまして、本市におきましても、官民一体となりまして観光推進組織でございます「しものせき観光キャンペーン実行委員会」を中心といたしまして、「維新まつり」の支援でございましたり、歴史博物館のPR、それから観光ボランティアと維新関連の史跡や名所を巡る街歩きツアーなどを実施をいたしまして、「明治維新150年」をテーマとした観光客誘致を推進をしていきたいというふうに考えております。この他にも、維新に関連した史跡が多く残っております下関駅周辺並びに長府地区、吉田地区を回遊していただく施策といたしまして、この3ヶ所を結ぶスタンプラリーの実施等も検討しておるところでございます。それから「明治維新150年」を活用して、本市では滞在時間の延長でございましたり、経済波及効果の向上にも努めていきたいというふうに思っております。それから、本市が「明治維新150年」ということで、深くかかわった「維新発祥の地」であるということを広く市民に知っていただくための施策といたしまして、例えばイベントでありましたり、行事、そういうものに対して今後、「明治維新150年」という冠を付けイベントを開催をするということもしたいというふうに思っております。それから「明治維新150年」をイメージする幟やペナントを作成して、市内各所に掲出をしたいということも検討しておるところでございます。また、近年、観光客の皆様にとりましては、地元の皆様とのふれあいが旅の目的の一つというふうにもなっておりまして、観光・スポーツ部といたしましては、引続き、全国に限らずインバウンドも含めまして「維新の街・下関」を発信していくとともに、市民の皆様に対しても広報活動を行うことで、全市的な気運を高めていきたいというふうに考えておるところでございます。以上でございます。よろしくお願ひします。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございます。それでは、教育分野についてですね。教育分野の取り組みについても重要になります。教育委員会から説明をお願いいたします。

萬松佳行(教育部長)

教育委員会におきましては、「明治維新150年」に向けまして、現在、歴史博物館においてその取り組みを行っております。また、「明治維新150年」に関連いたしまして、このたび明治維新後の近代化をテーマとしまして、関門海峡の文化財が日本遺産に認定をされております。この取り組みにつきましても併せてご説明をさせていただきます。まず歴史博物館の方からご説明をさせていただきます。

前田晋太郎(市長)

じゃ、町田さんからお願いいたします。

町田一仁(歴史博物館長)

歴史博物館でございます。歴史博物館では、本年が歴史博物館にとっての維新150年という意気込みで「明治維新150年」に取り組んでおります。と申しますのは、改元150年の来年は、その舞台が京都、東京、新潟、会津、函館などに移り、下関、山口県が主要な舞台から外れます。また、維新に多大な影響を与えました高杉晋作や坂本龍馬、このどちらの方が下関を活動の舞台としておりますが、維新を前に亡くなったこの2人の没後150年が今年にあたること、それから明治新政府樹立に大きな影響、決定打となりました大政奉還や王政復古も今年が150年であるということで、今年が歴史博物館にとっての維新150年の正念場という気持ちで取り組みを行っているところであります。それで、私共の取り組みでございますが、お手元に1枚ものの本年度の展示計画をお配りしておりますのでご覧頂けたらと思います。本年度の常設展示のほか、企画展5本、特別展2本を開催いたします。そのなかで維新関係につきましては、次のような展示を企画開催いたします。まず、1の常設展示でございますが、常設展示は下関の古代から近代までを各時代を特徴づけるテーマで通史展示しているところでございますが、そのなかでも幕末維新には展示を大きく割いておりまして、時代別では最も多い、4つテーマ、12のミニテーマで詳しく取り上げているところです。本年度は、さらに幕末維新の展示を充実させてまいりたいと考えております。2番目の企画展示についてでございます。現在、高杉晋作没後150年記念展「焦心録-晋作がかけた下関」を開催いたしております。会期は今度の日曜日、5月28日までとなります。また、同時に東行記念館におきましても、同じ「焦心録」のタイトルで没後150年企画展を共同開催しておりまして、こちらは「時代を映す晋作の言葉」をサブタイトルとしているところでございます。こちらの方は6月25日までとなります。次に2ページ目。3の特別展示でございます。特別展示では10月14日から12月10日までの期間で、坂本龍馬没後150年記念特別展「龍馬がみた下関」を開催いたします。特別展示としては、少し長めのほぼ2ヶ月間の会期としております。長めの開催といたしましたのは、市民の皆様のほか、今年後半にディステネーションキャンペーンで本市を訪れる観光客の皆様にご覧いただきたいこと、そして、これを目当てに本市を訪れる全国の龍馬ファンを見込んでのことでございます。長期開催となりましたのは、最近、多くの龍馬資料のご寄託がありまして私共歴史博物館が全国一、坂本龍馬の遺品や手紙を所蔵しているからであります。これらの所蔵品に加え、全国各地の龍馬資料を借用いたしまして開催する予定でございます。なお、4番目のシンポジウムについてでございますが、会期中の10月28日午後には、「生涯学習プラザ海のホール」において記念シンポジウム「志士たちがみた下関-海峡は未来の道」を開催する予定です。龍馬研究者によります基調講演、前田市長ほか、著名な幕末の志士のご末孫の方々によりますシンポジウムを企画いたしているところでございます。晋作の魅力、龍馬の魅力、これが下関の魅力ですが、2人の魅力で交流人口の拡大に貢献するとともに、下関にお越しになられた観光客の皆さんの満足度を高めたいと考えております。そしてなりよりも、これが本来の教育機関としての博物館の務めでございますが、児童、生徒をはじめ多くの市民の皆さんに、幕末の下関、その下関が時代のターニングポイントで果たした役割を改めてご認識いただき、ふるさとの歴史に誇りを持ち、未来への志を養っていただければと考えているところでございます。また、今年度は、京都市を中心に全国の幕末維新ゆかりの21都市、最近、大阪市も加わりまして22都市になりましたが、大政奉還150年記念プロジェクトに歴史博物館といたしても積極的に参加しておりまして、この22都市の観光スポットや博物館などを巡るスタンプラリーのスタンプポイントとして、下関の幕末維新の情

報を積極的に発信しているところでございます。なお、このほか、歴史博物館は戦前の明治維新記念館というべき長門尊攘堂、旧長府博物館を前身としており、その傍らには維新に尽力した有名無名の人々を祀っていた万骨堂がでございます。これらは歴史博物館の施設としてとりこんでいるところでございますが、下関の本格的な維新顕彰はここからはじまっております。展示やシンポジウムはある意味一過性のものでございますが、この施設を歴史博物館の学習支援のためのスペースとして、市民の方々のふるさとに対する誇りと愛着を育む「ふるさと学習館」として恒常的に活用できるよう、今後検討してまいる所存でございます。以上でございます。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございました。続いて、日本遺産の認定についてのお話を担当課長からお願いします。

沖吉洋一郎(文化財保護課長)

文化財保護課でございます。よろしくお願いたします。それでは、「明治維新150周年」記念に関連する取り組みとして、日本遺産の認定についてご説明をいたします。資料の③をご覧ください。まず、日本遺産についてでございますが、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図る制度でございます。この制度は、国の文化芸術立国の方針の下で、平成27年度に創設され、文化庁は平成32年までに日本遺産として100件程度を認定することにしております。文化庁は平成28年度まで37件を日本遺産として認定しており、平成29年度においては、79件の申請から「日本遺産審査委員会」の審査結果を踏まえ、17件を日本遺産として認定し、4月28日に報道発表を行ったところでございます。県内では、平成28年度までに日本遺産に認定された自治体はなく、平成29年度認定申請を行いましたのは、本市のほか、防府・山口・萩市が合同で申請いたしましたが、結果として、本市のみが日本遺産に認定され、県内初の日本遺産となったところでございます。本市の日本遺産ストーリーは、平成28年度において北九州市と連携して作成したもので、タイトルを『関門“ノスタルジック”海峡 ～時の停車場、近代化の記憶～』としております。ストーリーの概要は、『関門地域は、幕末の下関戦争を契機とした下関・門司両港の開港以降、沿岸部には重厚な近代建築が続々と建設された。狭隘な海峡を外国船が行き交う景観の中、日本が近代国家建設へ向け躍動した時代のレトロな建造物群が、時が停止したかのように現在も残され、まるで映画のワンシーンに紛れ込んだような、ノスタルジックな街並みに出会うことができる。』というものでございます。2ページをご覧ください。ストーリーを構成する文化財は全部で42件でございます。そのうち下関市分が19件、北九州市分が26件で、ストーリーからもおわかりのように関門海峡沿いに残る明治から昭和前期までのレトロな建造物群が中心となっております。構成文化財の一覧表に、網掛けをしておりますのが、本市の文化財でございます。文化庁は、日本遺産を活用いたしました地域活性化を支援するため、全額補助事業である「日本遺産魅力発信推進事業費補助金」を創設しておりまして、今後はこの補助金を活用しながら、文化財部門だけではなく、関連する部局とも緊密に連携して構成文化財の積極的な活用を推進してまいりたいと考えております。なお、日本遺産認定のチラシと現在、下関市立考古博物館において開催しております日本遺産認定を記念した企画展「下関の文化財2 - 昔日の関門海峡 -」のチラシをお配りさせていただきました。以上でございます。

前田晋太郎(市長)

ありがとうございました。これまで関係する部局で色々と説明がありましたけれども、ちょっと時間が迫ってまいりまして余りお時間ありませんが、教育委員の皆さんからのご意見がいただければと思います。よろしいですか。

(はい)

前田晋太郎(市長)

たくさんありますけれども、私として、冠をしっかりと色んなことに付けていって、まず市民の皆さんには深く意識をまず深めていただきたいし、そういった歴史に対する愛着であったり誇りであったり、そういうところに寄与できるような1年間の取り組みにしていきたいなと思います。それでシンポジウムは、これは西郷さんのご末裔もお越しになられるんですかね。今どうなってるのでしょうか。

町田一仁(歴史博物館長)

現在、調整中のごさいますして、固まってから公にしようかなと思っている状態のごさいます。

前田晋太郎(市長)

はい、わかりました。では、よろしゅうございますでしょうか。それでは協議事項については以上のごさいます。

【その他】

前田晋太郎(市長)

続いてその他に移りますが、もう今、大体お話しはよろしいかということでございますので、これからも市長サイドとそれから教育委員会が手を携えて、下関の教育の発展に努めてまいりたいと思っております。今日は第1回目ということで、また今後とも継続して行っていきたいと思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。それでは、進行を事務局の方に戻します。

【閉会の宣告】

萬松佳行(教育部長)

以上をもちまして、平成29年度第1回下関市総合教育会議を終了いたします。皆さん大変お疲れ様でございました。

(ありがとうございました)